

令和7年度 園評価書

I 経営の重点に関わること 評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	園評価	係務評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標など)
心身ともに豊かな子	友だちといっしょにやってみよう ～自分が好き！友だちが好き！わくわく大好き！～	やさしく ～関わる力～ 身近な人と笑顔で心地よい挨拶を交わしたり、安心して自分の思いを出し、人との関わりを楽しんでいる	・保育者は登降園時に気持ちの良い挨拶を自ら進んでいき、保護者との信頼関係の構築に務めているが、保護者アンケートでもう少し挨拶をしてほしいとの声もある為、常に丁寧で気持ちの良い対応を心がけたい ・子どもとの会話や、しぐさ・表情などから子どもの思いをくみ取り「いいね」と認めていく事で、子どもが安心して自分の思いを伝えようとする姿が見られている。保育者に認められることで、友だちの姿にも目が向き、友達が困っている時には優しく声をかける姿が増えた。また、土曜保育をきっかけに異年齢の友達と交流するようになり、園庭に出ると声をかけたり一緒に遊ぶことを喜んだりする姿が見られている	B	A	・森下学区では現在『挨拶運動』を行っている。挨拶で大切なことの一つに“相手よりも先に言う”がある ・先生方から気持ちの良い挨拶をして下さるおかげで、子ども達は先生に対して子ども同士でも挨拶をする姿がある。保護者同士も、親子遠足でも自然と楽しく触れたり、虫が好きな子の為に虫に関する遊びを増やしたりしてくれていると感じた ・保護者への挨拶に過剰に神経質になる必要はないので、子ども達に寄り添う今の姿勢を継続すればいいと思う	・園の中で、保育者から進んで挨拶や気持ちの良いやり取りをしていく事で、信頼関係を築くと共に、子ども同士、保護者同士も挨拶をきっかけに関わりが持てるようにしていく ・八幡山の自然をさらに身近に感じられるよう、遊びに行く頻度を増やしたりネイチャーゲーム等の楽しめる活動をしたりする中で、子どもの感動体験から好奇心や探求心を深めていく ・保育者も子どもと一緒に遊び、子ども自身の“やってみたい”“もっとこうしてみたい”と遊んだり挑戦したりする姿を受け止め、思いや状況に合わせた関わりをする中で、“やってみたらできた”“こうしたら面白かった”等、子どもの心が動く経験へつなげていく
		はつらつ ～学びの芽～ 身近な自然にふれたり、試行錯誤したり、夢中になって遊び、体験の中で感じたことを自分なりの方法で表現している	・一年を通し、八幡山の自然を中心に、草花・虫など身近な自然に触れてきた。秋にはネイチャーゲームを取り入れた散歩もくり返し、その都度、五感を使った体験に子ども達も夢中になった。また持ち帰った自然物を、製作やままごとなど遊びに取り入れるなど工夫して遊ぶ姿も多く、八幡山からの恩恵を感じた1年だった。 ・五感を使った体験が、他の遊びにもつながり、“じつくり遊ぶこと”“工夫すること”に面白さを感じる姿が増えた。来年度もネイチャーゲームを引き継ぎながらさらに様々な遊びを広げていきたい	A	A		
		たくましい ～生活する力～ 自分のことを自分でしたり、自分で考えて行動しようとし、自分でできる喜びを自信につなげている	・身の回りのことが自分でできるようにと願い、保育者は子ども一人一人の発達を理解し、見通しを持って関わっている、その時の子どもの気持ちや状況に応じて見守ったり一緒に行動することで『じぶんでできた』という喜びを味わい『またやろう』『やってみよう』とする姿が見られ自信につながっている	A	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	園関係者評価	園関係者評価委員会から	改善策 (来年度の具体的な取組目標など)	
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	担任同士が連携を図り、散歩や戸外遊びなど異年齢交流ができる場を設けている	・園庭では学年の隔たりなくあたたかい関わりがあり、園全体で子どもを見合う雰囲気ができている。年長児が下のクラスの子を遊びに誘ったり遊び方を教えたりする姿や、乳児が幼児の遊びに自ら入っていく姿等、自然形での交流ができている。早番遅番と一緒に過ごすこともあり他クラスの子の名前をほとんどの子が言えるなど、互いに親しみが持てる環境となっている ・隔週行われる週案会議の中で、各学年の活動や遊びを共有し、異年齢の交流を組み込んだ計画をたて、一緒に散歩に行くこと等、一緒に過ごす時間を楽しめるようにした。来年度も継続し、さらに異年齢交流を充実させたい	B	A	・子ども達が園庭で元気に遊んでいた。中には異年齢で楽しんでいる姿もあった。また、先生やお友達への声掛けも楽しそうだった ・今年度は年長児だけでなく年中児も外部から来た人との関りが増えたと感じ、子ども達にもとても良い経験となっているのを感じる	・学年の隔たりの無い自由な環境の中で、いろいろな友達の存在を知り遊びを楽しんだり、異年齢での散歩を積極的にいき、さらに交流を広げていく ・活動の計画を週案会議などで共有し、異年齢交流の充実につなげていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	保護者との連携を密にし一人一人の家庭環境の違いを捉え、温かく応答的に関わり生活リズムや情緒の安定を図っている	・保護者からの伝達は、各クラスのボードを有効活用し、早番職員→担任→遅番職員と伝達されている。特にけがについては、けがノートを利用して、小さな怪我でも記入して打ち合わせで共有し、伝達に間違いや言い忘れがないようにしている ・家庭の状況で登園時間や保育時間が一人一人違う為、コドモンや電話、登園時など、園児の状況を丁寧に確認し、把握するようにしている。また一人一人の生活リズムの違いを受け止め、子ども達が家庭から園生活、帰宅まで安心して穏やかな一日を過ごせるように心掛けている。	A	A	・コドモンの配信内容や先生・本人の話から、毎日いろいろな遊びや取組んでいる事がわかる。子どもは長期休みであっても一切行き渋る事なく、むしろ毎朝登園を急がされるくらい楽しく通っている	・コドモンの連絡を通して家庭と連携を図るとともに職員間では病気・怪我ノートを活用し子どもの状態を把握していく ・長時間保育の子どもが一日を安定した気持ちで過ごせるよう、早番遅番の保育環境を定期的に見直し、子どもに合わせた玩具や遊びの用意をしていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもがわくわくする姿を見取り、「おもしろそう」「やってみたい」と思える環境を整える。また子どもの気づきを「いいね」と認めたり、友だちの「いいね」に気付く関わりをし、「もっとやってみたい」につなげている	・季節に合わせ、子どもの“やってみたい”“もっとやりたい”が実現できる環境を用意し、子どもたちが自らあそびを選んで遊びだせるようにした。保育者は一人一人の遊びを見取り、探求心やひらめきに対して「いいね」と認めることでさらに遊びが深まったり、友達同士でも「いいね」と伝え合う事で遊びが繋がったりする姿が見られた。 ・エピソードを記入し、子どもの姿から保育者の意図がどこにあったか・どんな姿が育ったか・次に育てたいところはどこか等を整理した。エピソードを読み取り意見を出し合うことで、自身の保育を見直したり次につなげていくようにした	B	A	・コドモンの配信内容や先生・本人の話から、毎日いろいろな遊びや取組んでいる事がわかる。子どもは長期休みであっても一切行き渋る事なく、むしろ毎朝登園を急がされるくらい楽しく通っている	・子ども自身が好きな遊びを選び、“やってみたい”“こうしたい”と主体的な遊びに取り組めるよう保育者も一緒に遊ぶ ・エピソード検討の際には子どもの姿の語り合いを大切にし、子どもの内面の検証や子ども理解に繋げていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	ヒヤリハットに取り組み、職員間で共有し分析することで事故の再発防止につなげている	・分掌を中心にヒヤリハットの分析や、環境の改善に取り組むようにした。遊びの中で小さなケガはあるものの、病院へ行くような大きなケガは今年度3件程度で、昨年度に比べて少なく、安全を維持している。 ・打ち合わせでケガノートを利用し、報告と職員間の共有を行う。打ち合わせに出していない職員も『打ち合わせノート・けがノート』を確認する習慣が身につけており、共有ができている。分析からの検討について行う事が少なかった為、来年度の課題にした。 ・避難訓練は、減災教育の意識のもと、子どもと共に危険ヶ所を判断する事の大切さを学んでいる。来年度も様々な想定で訓練を行っていきたい	B	B	・設備面での課題もあると思うので、完全な対応は難しいと思うが適切に取り組んでいると思う	・減災教育を通して災害のイメージを持ち、子ども自身が“自分の命は自分で守る”という意識を高めていく。また職員も突発的で想定外の訓練に対応することで、状況把握や判断力などの力を身につけていく ・分掌を中心にヒヤリハットの分析を行い、会議で検証し再発防止策を考えていく
3 健康管理・指導	(1)健康教育の充実	保健活動や食育活動を通して自分の体に興味をもつこと、自分の体と関係があることを学べるようにしていき、食育の会の取り組みについて互関に掲示すると同時にコドモンでお便りを配信し、保護者にも伝えることで家庭でも関心を持てるようにした。来年度も継続するとともに、より子ども達の関心が高まる時期や内容・保護者への発信についてなど工夫していききたい	・毎月の身体測定や、年間で行われる健診や検査などを行うことで自分の体に関心を持てるようにしたり、毎月食育の会を行い食べものや自分の体と関係があることを学べるようにしていき、食育の会の取り組みについて互関に掲示すると同時にコドモンでお便りを配信し、保護者にも伝えることで家庭でも関心を持てるようにした。来年度も継続するとともに、より子ども達の関心が高まる時期や内容・保護者への発信についてなど工夫していききたい	A	A	・食品ロス→堆肥作りなどの取り組みまで教えてもらえてすごいと思う	・食育の会・栽培・クッキングと、食に関する活動を様々な面から行っていき子どもが本物に触れる機会を大切にし、実体験を重ねる中で、食と自分の体への関心を高めていけるようにする。また、家庭にも参加を促し、家庭で食に対する意識が高まるよう取り組む
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	一人一人の子どもの発達や個性を理解してサポートプランを作成するとともに、全職員で具体的な支援方法を検討し、実践につなげている	・きりんの会では支援児担当職員を中心に年間計画通り毎月行う事ができ、少人数の活動の中で、それぞれできる事を楽しみながら自信をつけていく事ができた。また、担当職員間で話し合いながら次のきりんの会に向けて準備も行う事ができた。来年度はケース検討ができる体制を作り、支援児の姿や日常的な支援について職員間で検討したり共有したりし、園全体でより充実するように工夫していききたい	B	B	・園児一人一人いろいろな子がいるが、それぞれの思いを尊重しつつも平等に接し、自分を大切にすること・友だちを大切にすることが自然とできるようになっていると思う。	・きりんの会を見直し、一人一人に合った参加の仕方で参加していく中で、できる事を楽しみながら自信をつけ自己肯定感を高めていくようにする ・職員間で支援児の把握ができるよう今の子ども達の状況を会議などで共有し、どの職員も変わらない対応の中で子どもが安心して過ごせるようにする
5 組織運営	(1)組織体制の充実	年間計画に沿って分掌担当がリーダーシップを図り、見通しをもって取り組むと共に、職員が協力し合って円滑な運営につなげている	・園の行事や運営業務について、各分掌が自分の分掌に対して責任を持ち、年間計画通りに進めるよう動いていた。職員間では、全体的計画を利用して、会議で期ごとに計画の状況を確認し合い、取り組みについて共有していった。その中で、内容の進捗状況や、問題検討等、分掌以外の職員が知らない事もあった為、来年度に向けて課題として工夫していききたい。	B	A	・園運営について保護者として特に不満は感じていない	・分掌としての責任を持つ事を継続すると共に、業務がスムーズにすすんでいく為に分掌会議を定期的に行い分掌以外の職員にも発信していく
6 研修	(1)研修体制の充実	研修テーマ「わくわくがつながる保育者の援助」の実現のために手立での実践と有効性の検証をしている	・年間5回の公開保育の中で、研修テーマ『わくわくがつながる保育者の援助』についての検証を行った。事前研では皆で子どもの実態について語り合い、事後研では視点に沿って分析し、子ども理解を深めた。また、子どもの『わくわく』とは何かを共有し、『やってみたい』『もっとやりたい』につながる環境についてみんなで考える事ができ、日々の実践に繋がっていった	A	A	・保護者会としても、園と保護者だけでなく保護者同士の関わりも増えるような事が出来たらいいと思う ・多文化になってきているので、優しい日本語を職員が覚えたり、翻訳やチャットGPTのような機能を有効活用したりするのいいと思う	・公開保育の事前事後研修のモチベーションについて検討を重ね、より学びが深くなるようにするとともに、学んだことを実践し、その後の変化についても検証していく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	子どもの興味関心に合わせた素材や道具を用意したり、子ども達が主体的に遊べるよう玩具を取り出しやすく片付けやすい配置にするなど、意図をもった環境を構成している	・子ども一人一人が自分で遊びを選び取れるよう、子どもの思いに合わせた環境づくりを意識していった。砂場の環境や絵本コーナーを整理し、より子どもたちが取り出しやすく遊べるようにし、遊び方や使い方について、保育者の意識を共有した。改善したことで子ども達にとっても使いやすくなった。 ・片付けについては片付けも遊びの延長と捉え、年齢や発達に合わせた促し方をすることで子ども自らがすすんで片付けよう意識するようになってきている	A	A	・保護者会としても、園と保護者だけでなく保護者同士の関わりも増えるような事が出来たらいいと思う ・多文化になってきているので、優しい日本語を職員が覚えたり、翻訳やチャットGPTのような機能を有効活用したりするのいいと思う	・保育者が遊びの環境を意識することで、子どもの“やってみたい”気持ちを引き出していく ・取り出しやすさや片づけやすさにも着目し、物の配置を改善していくことで、子どものさらなる意欲に繋げていく
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	お便りや連絡帳、クラスボードなどで子どもの姿や取り組みについて発信したり、保育参加・懇談会、面談を通して、保護者と子どもの育ちを共有している	・日々の姿をコドモンでデイリーボードを配信するようにした為、クラスだよりを廃止した。すぐに伝える事や、迎えに来れない保護者にも今日の様子がわかることが利点だが、子どもの生活状況をもう少し分かりやすくしてほしいと希望もある為、今後さらに工夫をしていきたいと思う。保育説明会・参加会・懇談会や面談等も丁寧に、園の取り組みを知ってもらったり子どもの姿を共有したりし、家庭と一緒に子どもを育てていきたい	A	A	・保護者会としても、園と保護者だけでなく保護者同士の関わりも増えるような事が出来たらいいと思う ・多文化になってきているので、優しい日本語を職員が覚えたり、翻訳やチャットGPTのような機能を有効活用したりするのいいと思う	・保護者が参加しやすい活動に無理の無いよう誘い、園の取り組みや子どもの成長する姿を知ってもらうと同時に、懇談会・参加会を通じて保護者同士が交流し関係を作る機会にしている ・外国籍の家庭が言葉の壁や文化の違いに対して持つ不安を、翻訳機やAIの活用などで補ったり、職員が言葉に対する研修で優しい言葉や伝え方を学んだりして、子育ての支援をしていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	公開保育や公開授業に参加したり、散歩や行事見学を通して近隣の小学校や連携園との交流を大切にしている	・職員が他園の公開保育に参加したり、自園の公開保育に外部の園が参加し、一緒に学びあうことができた。年長組は小黒こども園との交流を2回行い、一緒に遊んだりネイチャーゲームを伝えたりし、子ども同士の交流に加え、職員同士の情報交換の機会となっている。 ・近隣の小学校との関係が出来た事で、公開授業やイベント等に誘ってもらい参加したり、交流を深めたりすることができた。子ども達が散歩で校内に遊びに行く事も増え、小学校が身近なものになってきている。今後は合同研修会を開催するなどして幼小への連携を図っていききたい。	A	A	・小学校とつながりよくなったと思っている。園での様子が学校や地域共につながり、みんなで子ども達の成長に関わられたらと思っている	・森下小や、森下学区の近隣園と連携を取りながら、小学校の施設を利用したり、子ども同士が交流したりする機会を作っていく ・公開保育や園内研修、小学校の研修お互いの職員が参加したり合同研修の計画をする事で、職員同士の交流と相互理解につなげ、幼小の連携を図っていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域の方への子育て支援や地域の方との交流の機会を大切に、地域に根ざした園づくりに努めている	・今年度より絵本ボランティアが月に1回来園し、幼児対象に絵本の読み聞かせを行っている。回数を重ねることに関係も深まって、子どもたちにとっても楽しみな時間となっている。また、年長児は町内の敬老会やいきいき教室に出かけ、お年寄りとの交流の機会をもち、子ども達の歌や踊りにたくさんの拍手を頂き自信につながり嬉しかったり嬉しかったりお掃除ボランティアに来てくれたりした。女子高生がもう一度来たいと、交流の回数を重ねる度に子どもも親しみをもち、あたたかい時間となっている。	A	A	・地域交流も多く素晴らしいと思う ・いずれこの園を出ていく子どもの為に、小学校とのつながりに加えて、児童クラブとのつながりや吹奏楽を聴かせてくれたりお掃除ボランティアに来てくれたりした。女子高生がもう一度来たいと、交流の回数を重ねる度に子どもも親しみをもち、あたたかい時間となっている。	・近隣学校との交流をはじめ、絵本の読み聞かせなどのボランティアやおしゃべりサロンや園庭開放で園児と交流する等、地域の子育ての拠点のひとつとして貢献していく。また、森下学区の連絡協議会への参加をきっかけにして地域との繋がりを深めていきたい